

宮城県森林組合連合会第七代専務理事

## 三浦 義孝

「三出し運動」を道標に  
人と組織を導いた実践者

【みうら よしたか】

- 
- 1911(明治44)年 1月1日、一迫村(現栗原市)に  
生まれる
- 1932(昭和7)年 朝鮮総督府に入府
- 1942(昭和17)年 華北交通(株)に入社
- 1946(昭和21)年 全国農業会東北支部に奉職
- 1948(昭和23)年 宮城県燃料配給統制組合に奉職
- 1953(昭和28)年 宮城県森林組合連合会に奉職
- 1967(昭和42)年 宮城県森連参事
- 1971(昭和46)年 宮城県森連第七代専務理事
- 1991(平成3)年 4月3日死去

## 薪炭倉庫で荷をさばく四二歳の新人

薪炭倉庫で真つ黒になりながら働く男たちの耳に、貨物車の汽笛が響く。東京へ向かう貨車だろうか。思いを巡らす間も手は休めない。五〇俵は関東へ、この一〇俵は仙台市内の小売店へ、これは学校と役場へー。てきぱきと荷をさばいていく。

国鉄長町駅から西へ約一キロ、長町八幡前（現長町八丁目）の一角。一四二二平方メートルの敷地に、宮城県森林組合連合会（以下県森連）の薪炭倉庫が三棟建つ。

当時は薪炭燃料全盛期で、生産も取引も活況を呈していた。県森連は薪炭事業の拡大を打ち出し、一九五三（昭和二八）年、長町に倉庫を整備して職員を増員する。

その新入職員の一人が三浦義孝だった。戦前・戦中の青年時代をソウルと北京で過ごした三浦は終戦とともに帰国。八年後、県森連に職を得る。すでに四二歳になっていた。瘦身で威厳のある風貌は近寄りがたい印象を与えたが、後輩の面倒見がよく、一緒に額に汗することを厭わなかった。

倉庫に荷はあっても専用のトラックや乗用車はない。薪炭を市内に配達するときは三浦たち職員があらかじめ自転車で届け先を探し、確認してから営業車に委託した。年末は三〇日まで、年明けは二日から働き始めた。三浦の人脈の広さを活かして薪炭の取扱量を大幅に増やし、昭和二五年事業開始時には約一万九千俵だった年間の取扱量を三〇年には約七万三千俵に押し上げた。農林中央金庫と粘り強い交渉を重ね、薪

炭の購入資金を調達した。

何事にも積極的で意志が強く、思ったらず実行に移す。強いリーダーの資質はすでにこのころから表出していた。

## 資金を出し、仕事を出し、意見を出す、三出し運動

終戦後しばらく県森連は、仙台市定禅寺通櫓丁（現春日町）のみすぼらしい木造建物を事務所にしていた。仙台市から「街の美観を損なうので何とかしてほしい」と言われるほどのたたずまいだったが、県森連の職員たちしてみれば大切な事業の拠点である。

三浦も木町通りの自宅から櫓丁の事務所へ通勤し、ここで定款諸規程の整備や組合の経営指導に携わりながら林業と県森連の将来図を描いた。

のちに三浦が提唱する「三出し運動」は、このころから構想が温められていたのだろうか。

「組合員は組合運営に必要な資金を出し、組合の利用で仕事を出し、経営に意見を出すの三出し運動で、個々の経営力を高めていく」

それは森林組合システム（組合・県森連・全森連）の連携と利用で、林業を発展に導こうとする長期的な戦略だった。

昭和四九年、全国森林組合連合会は「森林組合新生一〇カ年運動方針」を決議し、系統一丸となって厳しい局面を打開し、強靱な協同組合へ新生を図ることを宣言した。県森連はこれを受けて「宮城県森林組合新生一〇カ年運動推進要領」を策定。県内全組合の参加で運動を展開することになった。

「三出し運動」は、このとき三浦が提唱したものだ。「組合員に林業振興による豊かな地域社会建設の担い手である自覚を持ってもらい、三出し運動の実践で組織の充実と財務の健全化、経済事業の拡大を図っていく」。県森連の新生一〇カ年運動はそうして走り出した。以後、三出し運動は県森連や県内林業人たちの合言葉として事業の推進力となり、三浦の名とともに全国に知られるようになる。

また、三浦は総務課長から総務部長、参事、専務理事へと昇る過程で、系統強化の考えのもと、次々と成長の布石を打っていた。

ひとつは青年部の設立だ。

昭和三五年、政府の「貿易・為替自由化計画大綱」で丸太や製材、合单板等の輸入が自由化されると、国産材は需要が減少し、森林組合は厳しい経営を強いられるようになった。農山村から都市部への労働力流出が進み、過疎化や高齢化がさらに林業活動を停滞させた。将来に危機感を抱いた三浦は、昭和三九年、森林組合の青年部設立に向けて活動を始める。

「次代の民有林を担うのは、森林組合の後継者である、きみたち青壮年なんだ」

山を思い、協同組合を思う三浦の情熱が聞く者の胸を打つ。

当初は一部の組合にとどまっていた活動も三浦や職員たちの地道な努力で共感が広がり、昭和四九年ついに宮城県森林組合青年部連絡協議会が発足する。全国でも初めての出来事だった。

―若さをもって森林組合運動に参加する。十分な研さんを積み、有能な森林組合役員を輩出する。事業を積極的に推進するため実践活動に主眼を置く―

協議会は実践的な活動目標を掲げ、シイタケの取り扱いや共済事業を推進。県森連の活動の重要な一角を担い、やがて理事を多数輩出する機関へと成長していく。

## 共販、流通、協業の課題に向き合う

県森連は昭和四五年、仙台市上杉に会館を新築移転した。三浦のもとにはよく客人が訪れた。ときにはコーヒーを飲みながら、こんな話をすることもあった。

「素材生産は単位森林組合が行ない、県森連は流通面を担当すべきなのです。現在、県森連の木材共販所は仙台、石巻の二ヶ所だけです。あと五、六ヶ所は必要でしょう。取扱量も現在は三万立方メートル程度ですが、これを大幅に増加して県内生産量の三分の一ぐらいまで伸ばさなければなりません。そうすれば価格をリードできます」

木材共販事業は森林組合の中核となる事業だ。昭和三五年に定禅寺通櫓丁の事務所

と長町の薪炭倉庫で取り組みが始まり、その後仙台市中野と石巻市湊の二ヶ所を開設して定例市を実施してきた。

三浦は各ブロックごとに木材共販所が必要と考え、迫・仙北・仙南にそれぞれ一ヶ所ずつ共販所を設置。さらに大衡・津山へと拠点を増やし、販売網の拡大を図った。

特筆されるのは、木材共販所に単なる共販機能だけでなく、購買品のストックポイントや大型機械の駐留所などの役割も持たせたことである。当時は森林組合の協業体制確立運動が盛んだった。三浦は共販所を協業活動の拠点とすることで運動を後押ししようと考えたのだった。

昭和四八年、県森連は協業体制確立運動の一環として広域合併構想を打ち出した。

三浦がまず着手したのは、仙台地区と利府町、泉市根白石の三組合による協業実行組合の組織化だった。指導員の派遣や事業収入の平等分配、作業員の流動化など様々なルールを決めて組合を運営。月一回の委員会や関係職員の間日常的な交流で自然に合併の気運が高まり、昭和五一年、四市六町による宮城中央森林組合が発足した。

広域合併はこれを原動力に計画を進めていくことになる。この段階を踏んだ方法は通称「宮城方式」として全国的にも高い評価を呼んだ。

## 自信を持った先読みで別法人を設立

「明日広葉樹の山取りをするからトラックを用意しておいてくれ」

三浦の命令で若い職員たちが握り飯とスコップを持って山に向かった。イロハモミジやヤマボウシなどの広葉樹を掘ってトラックに積み、大衡の圃場に植栽する。三〇四日続けると、約三〇〇本もの樹木が集まった。緑化ブームが到来したのはそれから数年後のことである。山取りした約三〇〇本の樹木は一本残らず売れて職員たちを喜ばせた。

昭和四〇年代の高度成長期、仙台市では鶴ヶ谷や南光台、将監など大型団地の開発が相次ぎ、公園緑化や住宅の庭園緑化のニーズが高まった。

県森連ではこれに因應するため、庭園樹や花木、盆栽などの販売事業計画を立てた。また住宅着工数の急速な伸びを見て、国産材による木造住宅供給事業の構想を進めた。

この二つの計画を合流させる形で昭和四七年に設立したが、株式会社宮城県林業開発センターである。

三浦は同センターを系統事業の補完組織として位置付けたが、こんな話もしていたという。

「職員はいずれ定年を迎える。そのとき再就職できるような会社にしていくのが目的でもあるんだよ」

経験豊かな系統の人材にとつて活躍の場が用意されていることは安心にも励みにもなつたろう。三浦の先読みは合理的で、かつ情があつた。

昭和四九年、三浦はふたたび別法人の設立に取り組む。宮城チップ工業株式会社だ。当時パルプ会社の原材料受け入れは原木からチップに移行しつつあつた。三浦は県内森林組合のチップ生産や取引状況を見て、改善の必要性を感じ、製紙会社との共同経営によるチップ工場開設を模索する。つながつた相手は北越製紙株式会社で、三浦はさつそく会社設立を図る。

全国でも初の試みに、他のパルプ会社からは何度となく中止すべきだと声があがつたが、三浦は「拡大造林を進めるためにはどうしても必要な会社なのだ」と根気よく説得を続けた。

新会社には全森連と県森連が共同で出資。それまで森林組合が個別に実施していたパルプ材集荷の一元化と、チップの安定的な生産・供給、事業の効率化を図ることができた。

## 信念にゆるぎがなく、果敢に思うことを実践

三浦は徹底して実践の人だった。

「(三出し運動は)組合員に呼びかける具体的提案であり、評論家であるより実践者

たれということであったと思う。豊の上で泳ぐ練習をするより、水に飛び込めとそれは呼びかけているのである」

県森連会長で角田市長も務めた佐藤清吉は、平成元年に発行された『三浦義孝さんの退任を記念して 三出し運動の軌跡』のなかで、そう述べている。

普段は温厚だが、三出し運動や系統利用の話になると一転して厳しい態度で臨み、強靱な意志を見せつけた。

有言実行を重んじ、「組合に口ばかり出して仕事も金も出さない組合員は真の系統人ではない」と舌鋒鋭く批判することもあった。

赤字に陥った組合やチップ工場の建て直しに親身になって取り組む一方、金融事業などではときに鬼となつて無情な決断を下した。信念にゆるぎがなく、果敢に思うことを実践していった。それは軍人としての経験から得た人生訓であつたらうか、それとも持つて生まれた資質であつたらうか。

専務理事在任中、三浦は部下に「二四時間いつでも気の休まることはない」と吐露している。県森連のリーダーとしてつねに率先垂範を実行し、林業人としての矜持を保ち続けたゆえの言葉だろう。それは緊張のなかにも充実した日々だったに違いない。

三浦の足跡をたどると、いつも秀峰を身近に仰ぎながら生活していたことが分かる。生地一迫村の栗駒山、学生時代に盛岡の街から見たであろう岩手山。戦時下の異国で

はソウル盆地を囲む広州山脈や北京郊外の山脈に、故郷を思い出すこともあったかも知れない。

そして梶森連はまさに山が職場だった。

専務理事の職を退く前年、三浦は自ら緑化木の整枝・剪定をしようと大衡綜合センターに向かった。自宅から弁当を持参し、仙台発六時三〇分のバスに乘車。森林組合前バス停で下車し、センターが用意した迎いの車には乗らずに二キロの道を歩いて圃場に着く。圃場では作業員の陣頭に立ってハサミを持ち剪定作業を進めていく。それが夕方まで続いた。いくら山登りなどで鍛えてあるとはいえ、すでに七七歳。一日の作業が終了するころには、さすがに疲れて樹木の陰に腰をおろしていたという。

明治、大正、昭和を生きた三浦が、剪定の樹間の向こうに見た山は、望郷の山だったろうか。それとも梶森連時代に訪ね歩いた数々の山林だったろうか。林業界に偉大な足跡を残し、三浦が去ったのは昭和が終わって三年後だった。